ネルヴァルをめぐる随想

髙野敦志



目次

表紙の写真 mrhayata

はじめに

十九世紀フランスの詩人にして作家、シュルレアリスムSurréalismeの先駆者として再評価されたジェラール・ド・ネルヴァルGérard de Nervalは、一八〇八年ナポレオン・ボナパルトNapoléon Bonaparteに従軍していた医師の子として生まれた。同行した母はほどなく病没したため、亡き母の面影を生涯追い求めることになった。また、幼い頃に過ごしたヴァロア地方の思い出と、大叔父の蔵書から得た神秘主義の知識が渾然一体こんぜんいったいとなって、ネルヴァルの文学を生み出す源泉となった。

生前のネルヴァルは、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテJohann Wolfgang von Goetheの『ファウスト』Faust第一部をフランス語に翻訳し、実力はゲーテからも認められていたという。一八四一年初めて狂気の発作に襲われる。翌年、古代文明を探究するため、カイロ、ベイルート、コンスタンチノープル（イスタンブール）を旅した。しばらく売文生活を送るが、一八四九年頃から入退院を繰り返すようになり、夢と現実の間をさまよいながら、理性がよみがえった合間に、詩や小説、旅行記を発表していった。

ネルヴァルの重要な作品の大半は、死が差し迫りつつある時期に書かれた。一九五一年の『東方の旅』Voyage en Orient に始まり、死の前年の五四年には、「シルヴィ」Sylvieなどを含む短編集『火の娘たち』Les Filles du feu、「廃嫡者」EL DESDICHADOなどを含む『幻想詩篇』Les Chimèresを発表した。遺作となった『オーレリア、あるいは夢と人生』Aurélia ou le rêve et la vieは、一九五五年に前半が生前に、後半が死後に発表された。

ここでは、僕自身が実際に読んで感じたことを、思いつくままに記すことにしよう。オリエントを旅した長大な旅行記『東方の旅』には、実際に中東で見聞きしたり、書物から得た膨大な知識が詰め込まれており、それを十分に鑑賞するためには、ネルヴァル自身に匹敵する知識が必要だろう。評価の高い『幻想詩篇』にしても、背

景となる知識がなければ、象徴的な詩句に込められた意味を知ることはできない。
　最初に「シルヴィ」や『オーレリア』について触れたのは、若い頃から愛読していたからというだけでなく、ネルヴァルの全作品の中で、もっとも重要な作品だと考えられるからである。「シルヴィ」を翻訳で読むなら、入沢康夫いりさわやすお氏のものをお勧めする。ネルヴァルの繊細な言葉遣いが美しい日本語で再現されている。『オーレリア』に関しては、膨大な注釈がついた稲生永いのうひさし訳をまず読んだ。それによって、『オーレリア』という難解な作品の理解を深めることができた。その後、篠しの田だ知ち和わ基き訳も読んでみた。こちらは注釈がないので、作品に集中して読むことができた。ネルヴァルの作品を鑑賞するためには、注釈を見ながらの精読と、本文のみの味読がともに大切である。
　続いて触れた「緑の怪物」Le Monstre Vertは、僕が初めて読んだネルヴァルの短編で、しかもフランス語だったので、強烈な印象を若い心に刻んだ。ごく短い作品なので、自分自身でも翻訳してみたほど思い入れがある。
　ネルヴァルには『幻視者　あるいは社会主義の先駆者たち』Les Illuminés ou les precurseurs du socialismeという奇妙な題名の伝記集がある。この中で日本人に知られているのは、『悪魔の恋』Le Diable amoureuxを書いたジャック・カゾットJacques Cazotteと、魔術師のアレッサンドロ・ディ・カリオストロAlessandro di Cagliostro、『ニコラ氏、または解き明かされた人間の心』Monsieur Nicolas, ou Le Cœur humain dévoiléのレチフ・ド・ラ・ブルトンヌRestif de La Bretonneぐらいではないか。この中でフランス革命について語り、自身も処刑台の露と消えたカゾットについての記述が、僕の心をもっともとらえた。
　そのほか、神秘主義と詩人の関わりや、ネルヴァルとマルセル・プルースト Marcel Proustのテキスト比較、無意識の世界を探究する方法についてのエッセイも収録した。ネルヴァルの時代とは異なり、現代では夢の世界は、方法さえ誤らなければ、より安全に探究できるようになったが、狂気の世界と隣り合わせであることは、や

はり忘れてはならないだろう。

　二〇一七年八月八日

髙野敦志

ネルヴァルの「シルヴィ」について

夢と現実の間で揺れる心は、文学にとって永遠のテーマである。夢の世界に生きてきた子どもが、現実の社会とぶつかることで、青春期の苦悩が生まれるわけだが、大抵の人間は現実しか見えなくなっていく。いつまでも純真な魂を持ち続け、若者のような夢想に耽ふける人間は、あいつは詩人だよと、皮肉交じりで呼ばれるようになる。

ジェラール・ド・ネルヴァルは、まさしくそうした詩人であり、最後は夢の世界に呑のみ込まれて、首をくくって死んだのである。死の直前に書かれた『オーレリア』は、神秘的な美しさにあふれているが、狂気と死の影を感じるから、人によっては受け付けないだろう。しかし、短編集『火の娘たち』に収められた「シルヴィ」は、子供の頃や青春時代に憧憬しょうけいを抱いだく者なら、誰でも心を打たれるに違いない。

語り手の私はパリで出て、女優オーレリーに入れあげている。帰ってベッドに入ると、寝入りばなに幼い頃の記憶がよみがえってくる。幼友達のシルヴィのことしか心になかったのに、アドリエンヌという美しい金髪の女の子に心を引かれる。彼女には王家の末裔まつえいの血が流れていたことに、村娘のシルヴィにはない高貴な美しさを感じたのだろう。

やがて帰郷した私は、美しい女性となったシルヴィと再会して心を躍らせる。シルヴィとなら結婚してもいいと感じる。ある日、シルヴィの年老いた伯母の家を訪れた二人は、伯母の衣装箱から結婚衣装を見つけ出す。シルヴィはそれを身にまとい、私は狩場番人の花婿衣装を着て、いきなり伯母の前に姿を現す。伯母は自分自身の若かった頃の姿を姪めいのシルヴィに見て、懐かしさに涙を流す。私とシルヴィはその日限りの花婿花嫁となる。

私は優柔不断なままで、求めれば結婚できたはずのシルヴィを放っておく。かつてアドリエンヌが現れた場所にシルヴィを連れて

行き、アドリエンヌの幻と現実のシルヴィが一つであることを語ろうとするが、シルヴィにはすでに恋人ができていた。私の乳兄弟ちきょうだいにあたる青年だった。

　女優オーレリーと交際し始めた私は、アドリエンヌとの思い出の場所に連れて行き、幼い頃に見た幻について語る。しかし、オーレリーは憤然として答える。「あなたが求めていらっしゃるのはドラマよ」アドリエンヌの影を、オーレーリーに求めているに過ぎないということを、女優に見抜かれてしまうのである。

　語り手の私にとって、アドリエンヌは永遠の理想であり、イデアとも言うべき存在である。現実の幸せを得ようとすれば得られたはずなのに、夢の世界に生きたばかりに、私はオーレリーもシルヴィも失うのである。しかも、シルヴィの口から、修道女となったアドリエンヌがすでにこの世を去っていることを知らされる。

　この作品には牧歌的な美しさがある。語り手の私は現実には幸せになれなかったけれども、このように美しい思い出に浸れただけでも幸せである。しかも、これはネルヴァル自身の体験そのものではない。錬金術のように、いったん過去の思い出を元素レベルに還元し、そこから新たに育はぐくんだ幻の思い出、このように有り得たかもしれない夢なのである。

参考文献

ジェラール・ド・ネルヴァル「シルヴィ」（入沢康夫訳　講談社『世界文学全集 ネルヴァル　ロートレアモン』所収）

ネルヴァルの『オーレリア』

夢を扱った文学は多いが、フィクションとしての夢ではなく、作家自身が実際に見た夢が、そのままに近い形で扱われているものは、それほど多くないと思われる。というのは、そのままの夢は断片的だし、前日の出来事やら、個人的なこだわりやらが大部分で、他人が読んでもさっぱり面白くないからだ。島尾敏雄に『夢の中での日常』という本があるけれども、何だか灰色の印象しかない。特攻隊の隊員として、加か計け呂ろ麻ま島じまで過ごした体験を記した短編と比べて、何という淡泊な描写だろう。

フランス後期ロマン派の作家ネルヴァルが、精神病を患っていたというのは事実である。錯乱状態に陥って、何度も病院に収容されているからである。その一方で、錬金術やエジプトの神話にはまり、中東を実際に旅しただけではなく、ゲーテの『ファウスト』をフランス語に訳し、原作者のゲーテからも賞賛されている。そのような詩人が正気に戻った時に、錯乱した自分自身を分析しながら、夢の内容を記したという特異な記録が、遺稿となった問題作『オーレリア』なのである。

現実の世界と夢の世界が、平行して存在すると仮定してみよう。夢の世界が現実に流入してきた時、ネルヴァルは夜空の星を見て、取り憑つかれたように歩き出す。どこへ行くのかと友人に問われ、「オリエントの方へ」とつぶやく。実際のネルヴァルは、現実から逃れようとして服を脱ぎ捨て、駆けつけた警官に取り押さえられそうになると、超人的な力が出で来るように感じて、大暴れするのである。外部の人間から見れば、単なる狂人に過ぎず、しまいに精神病院に閉じ込められてしまう。しかし、正気が戻ると退院を許されて、幼時に育ったヴァロア地方を旅したり、パリの街を徘徊はいかいしたりしながら、短編集『火の娘たち』や『オーレリア』を書いていくのである。

この作品は第一部と第二部に分けられ、前半は生前に発表されている。ここに登場する夢は、色のついた異様な、生々しい映像ばか

りである。地球の内部に呑み込まれていった語り手の私は、今は亡き人々と再会を果たし、人間の魂が死後も続くという慰めを得る。ドレスを着た女性が腕を広げると、ルイス・キャロルLewis Carrollの『不思議の国のアリス』Alice's Adventures in Wonderlandみたいに、彼女の体が巨大化していく。庭園自体と化した彼女は、私の手から逃れてしまう。茨いばらの中に女の胸像を発見し、そこが墓地であることに気づいて、私の求めてきた女性、オーレリアが死んだことを悟る。

　このオーレリアは、エジプトの女神イシスと、聖母マリア、ネルヴァルが幼い時に死んだ母、かつての恋人でネルヴァルを捨てた後に死んだ女優、ジェニー・コロンが混淆こんこうした女性である。このオーレリアとの再会を求めて、私は正気と狂気の間をさまようのである。

　第一部ではまだ、夢の内容を分析しようという意識が働いており、鮮明で奇妙な夢を楽しみながら追っていく余裕がある。しかし、第二部では正気が狂気に打ち負かされつつある。ヨハネの黙示録のような、世界の終末を感じさせる陰惨な空気が漂っている。神話的な怪物が現れたり、多くの人が殺される映像がよぎったり。地球が軌道を外れてしまい、黒い太陽が現れて、神さまである太陽が死んでしまったと思い込んだり。読んでいるこちらも、かなりつらくなってくる。異様な緊張がいつまでも続いていく……。

　どこかで感じたことがあるような……。芥川龍之介の「歯車」を読んだ時の印象に似ている。息詰まる空気が、絶え間なく胸を締めつけていくのだ。自殺しようとしている人間が書く文章に共通している。確かに、『オーレリア』の語り手も、命を絶とうという衝動に駆られている。

　結末にオーレリアと思われる女神が現れ、試練の終わったことが告げられる。その時に夢で見た映像が「記憶すべきことがら」として、巻末にまとめられている。その中で印象的なのが、ヒマラヤに咲く小さな草、勿忘草わすれなぐさである。私を忘れないで、という言葉が耳の底に響く。オーレリアの声であると、解釈することも

可能である。死が避けられなくなった人間が、死の恐怖を和らげ、死と和解するための、末期まつごの癒いやしのように思えてならない。死後にオーレリアと再会できる、という慰めを得て、ネルヴァルはついに縊死いしするのである。

参考文献

ジェラール・ド・ネルヴァル「オーレリア」（稲生永訳　講談社『世界文学全集 ネルヴァル　ロートレアモン』所収）
ジェラール・ド・ネルヴァル『オーレリア』（篠田知和基訳　思潮社）
島尾敏雄『その夏の今は・夢の中での日常』（講談社）

ネルヴァルの「緑の怪物」について

僕が大学で選択した外国語は、フランス語だった。一年生は文法や簡単な読み物だけだったが、二年生になると、いきなりフランス文学の作品を読まされた。そのうちの一篇が、ジェラール・ド・ネルヴァルの「緑の怪物」だった。執筆されたのは一八四九年で、死の六年前である。

これが初めて読むネルヴァルの作品で、しかもフランス語でだった。読み終えたとき、何ともへんてこりんな話だと思った。にもかかわらず、不思議と心をとらえて放さなかった。ネルヴァルは散文作家というよりは詩人である。詩人であるということは、描かれる内容以上に、言葉の使い方やイメージに神経を使っているということだ。

詩人のピエール・ルヴェルディPierre　Reverdyが語ったように、互いに隔たった意味を持つ二つの語を、的確に近づけることによって、詩的な驚異というものは生まれる。シュルレアリスムの先駆けとされる詩人ロートレアモンLautréamontは、『マルドロールの歌』 Chants de Maldororの中で「手術台の上での雨傘とミシンの偶然の出会いのように美しい」と書いたが、ネルヴァルの文章は、あり得ないような出会いの驚異に満ちている。

物語は「ヴォヴェールの悪魔」に関する慣用句の解説から始まり、その悪魔にまつわる史実が記述される。語源や歴史といった学問の話と、超自然的な悪魔の伝説が結びつけられているのである。

次いで、空き家や地下墓地カタコンベから、けたたましい笑い声や、グラスのカチカチいう音が聞こえてくる。しかし、地下には酒の瓶しかないはずだから、それは悪魔のしわざに違いないということになる。

そこでようやく主人公の伍長が登場する。小説の作法からすれば、ここまで主人公が出てこないのは破格である。しかも、この伍長が怪物退治に名乗りを上げたのは、褒賞金ほうしょうきんでご執

心の縫子と結婚するためだった。瘋癲ふうてんという語を冠したくなるような人物なのである。
「神も悪魔も信じない」と言い放って、酒蔵さかぐらで伍長が目にしたのは、優雅な姿で踊る瓶たちだった。伍長が見た物が悪魔のしわざか幻かは分からない。精神の病を患っていたネルヴァルが描く幻覚は、鮮明に視覚に訴えてくる。伍長は瓶を抱き寄せたが、うっかり落として割ってしまう。飛び散ったワインは、女の血を連想させる。それが裸体の女の死体のイメージにつながる。連想が連想を生む幻覚の生々しさに、鬼気迫るものを感じたものである。

話は褒賞金を得た伍長と縫子の後日譚へと続く。結婚した二人が授かった子は、体が緑色でしっぽが生えていたのである。酒蔵での出来事は幻覚と解釈できるが、我が子が「緑の怪物」では、悪夢から逃れることができない。怪物は癇癪かんしゃく持ちのいたずらっ子に成長したので、夫婦は救いが得られず、苦しみから逃れるために酒浸りになる。
ここへ至ると、どこからどこまでが現実で、どこからが幻覚なのか分からなくなる。二人は酒蔵に住まう悪魔の夢に、夜な夜な悩まされ続ける。そして、十三歳になると怪物は忽然こつぜんと消える。不信心で罰せられたという、とってつけたような教訓を添えて、投げ出すように物語を終えてしまう。
物語の一貫性をこれほど無視した作品も珍しい。各場面のイメージが、思いがけない形で結びつけられている。さまざまな宝石の破片を見せられているようで、各場面のつながりは乏しい。要するに、ネルヴァルは怪奇譚の形で、「手術台の上での雨傘とミシンの偶然の出会い」をやったのである。

思い入れのある作品であるため、拙訳をpodcastにアップロードしてあります。よろしければ、ダウンロードしてご覧下さい。

ネルヴァルによるカゾット

ジェラール・ド・ネルヴァル(一八〇八～一八五五)は、二十歳の頃に『ファウスト』の第一部を翻訳し、原作者のゲーテから激賞されている。その一方で、重要と評価されている作品の大半は、一八五〇年代の晩年に集中している。中東を旅した記録『東方の旅』（一八五一）を皮切りに、「シルヴィ」などの短編を集めた『火の娘たち』(一八五四)、「廃嫡者」などが収められた『幻想詩篇』(一八五四)、神秘的な夢と狂気に彩られた遺作『オーレリア』(一八五五)などを発表した。
『幻視者　あるいは社会主義の先駆者たち』も、書物として刊行されたのは、一八五二年のことである。扱われた人物で、日本でも知られているのは、カゾットとカリオストロ、レチフぐらいかもしれない。ジャンルとしては、いわゆる史伝に属するものである。副題の「社会主義の先駆者たち」が、ぴんと来ないかもしれないが、シャルル・フーリエCharles　Fourier流の空想的社会主義を連想すればいいだろう。ユートピア utopiaを夢見ている幻視者ととらえれば納得がいく。二十世紀に出現した社会主義国家が、アンチ・ユートピアの最たるものになるとは、十九世紀を生きたネルヴァルには知る由よしもないのだが、その可能性には気づいていただろう。
理性の世紀と言われた十八世紀、愛と自由と平等を標榜ひょうぼうしたはずのフランス革命が、反革命とレッテルを貼った者を、次々にギロチンにかけていった史実を知っていたからである。その犠牲者の一人が、この作品でも扱われたジャック・カゾット(一七一九～一七九二)である。

カゾットはフランスのディジョンで生まれ、海軍省の役人として働きながら、文筆活動を続けていた。フランス幻想文学の祖とされ、代表作の『悪魔の恋』は日本語にも翻訳されている。『幻視者　あるいは社会主義の先駆者たち』に収録されているカゾット論は、『悪魔の恋』の序文として書かれたものである。

この作品をカゾットが書いたのは、五十代になってからのことである。その直後、カゾットは秘密結社のメンバーの訪問を受け、悪魔を呼び出す方法などの秘儀を公開したことと、空気の精などの無害な存在を悪魔とした過あやまちを責められる。カゾットは秘教組織に属したことなどはなく、秘儀に関する知識も書物から得て、想像力で補ったに過ぎないと答えた。この辺りはオペラ『魔笛まてき』を作曲したモーツァルトMozartが、フリーメイソンFreemasonryの秘儀をもらしたとして毒殺されたという説を想起させる。

ネルヴァルのカゾット論は、史実を元にしながら、関係者の対話を含めるなどして脚色してあり、歴史小説を読んでいるように面白い。神秘学へとのめり込みながらも、役人としての仕事はきちんとこなし、温和な老人として平穏な晩年を過ごすはずだった。その運命を変えてしまったのは、一七八九年に勃発ぼっぱつしたフランス革命である。

その数年前、大貴族の食卓で、カゾットは不吉な予言をしたとされる。会食していた人々の多くが、革命によって処刑されると告げたのである。これが史実かどうかは分からない。革命後に作られた話だった可能性はある。しかし、歴史小説として読むなら、史実かどうかにこだわる必要はない。処刑を予言された人々の動揺が、目に見えるように描かれている。

王党派のカゾットは、ルイ十六世Louis XVIの逃亡を助けようとした。逃亡中の廃王に対し、自宅を隠れ家がとして提供しようとまでした。ところが、国王に宛あてた手紙が革命軍側に発見され、重大な罪として逮捕されてしまうのである。

革命が自国にも伝播でんぱするのを恐れたドイツが、フランスに侵入しようとしているという噂が伝わり、怒り狂った民衆は捕らえられていた王党派の人々を、人民裁判で次々に処刑していく。ネルヴァルの筆が振るわれているのは、カゾットの娘が老父の命乞いをする場面である。齢よわい八十に近い父を思う孝心こうしんを示すことで、自宅に戻ることが許されたのである。

　しかし、カゾットはこのままでは済まないだろうと語る。自身の死を見通しているような、諦めの境地に至っている。案の定、カゾットは再び逮捕される。一七九二年九月二五日午後七時、家族宛の短い遺書を残すと、「私は、生きてきた時と同じように、神とわが王とに忠実に死んでいくのだ」と死刑台で叫んだ後、ギロチンによって命を絶たれた。

参考文献

ジェラール・ド・ネルヴァル『幻視者　あるいは社会主義の先駆者たち』（入沢康夫訳　現代思潮社）

詩人の反抗

宗教が芸術家にインスピレーションを与える、というのは、過去の歴史を顧みれば明らかなことである。ただし、一般に流布るふしている顕教けんぎょうは、日々の戒律を守らせることに終始して、単なる倫理道徳に堕する恐れがある。教義に則のっとって書かれた詩歌しいかも、単なるプロパガンダに過ぎぬ場合すらある。

そこで、宗教にモチーフを借りる詩人は、正統な教義には反するような、異端的な象徴の用い方をするようになる。世の中の常識にとらわれない自由な魂は、独自の世界を築き上げていくわけだが、むしろ、宗教の隠れたより深い部分と通底している。というのも、宗教も芸術も、本来は個人の枠を越えた、心の深層に触れるものだからである。

イスラム教の神秘主義、スーフィズムSufismにおいては、こうした神秘詩が逆に、秘教的世界の一隅いちぐうを形作っているのである。

例えば

酒……忘我・臨在する絶対者

釣人……導師

酒場……聖域

泥酔者……存在一性の大海に溺れ、現世の変転を意識しないスーフィー

といった具合にである。ペルシャにおけるスーフィーの代表的な詩人、ルーミーRūmīは次のように謡っている。

愛する人々よ、
汝なんじ自身を過去より解き放て。
狂うのだ！
蝶になれ、
汝の燃える心の中で！

家を去り
在りし日の己おのれを捨てよ。
そこで同じ波に乗る者らと会え。
内なる己を清めて
清らかになるのだ。
そこで「かの」お方の御手より来る
愛の葡萄酒ぶどうしゅを飲むがよい。
酔うのだ
「愛する者」と溶け合って。
一つになれ、
汝自身と。

詩人と秘教とのこうした関係は、ネルヴァルの『幻想詩篇』を錬金術から解釈すべきではない、というアントナン・アルトー Antonin Artaudの主張を連想させる。

つまり、ジェラール・ド・ネルヴァルが神話体系と錬金術とによって解釈されるのを見るよりは、私は　むしろ、ジェラール・ド・ネルヴァルの詩によって錬金術とその神話が解明されるのを見たい。

アントナン・アルトー

「『幻想詩篇』論」（田村毅訳）

アルトーの言わんとしていることは、既成の象徴体系に対する詩人の抵抗であり、ネルヴァルの詩は錬金術的な外観を呈していても、過去の隠秘学いんぴがくの書を紐ひも解といても理解されるものではない、という点である。言い換えるなら、宗教と文学は対等

の位置にあって、互いに双方を賦活ふかつし合うとともに、真の詩人が語る言葉は、新たな宗教を創造するように魂を激変させる力を持っている、というのである。

参考文献

アントナン・アルトー「『幻想詩篇』論」（田村毅訳 冬樹社『カイエ特集・ネルヴァル』一九七九年二月号 所収）
ラレ・バフテイヤル『スーフィー』（竹下政孝訳　平凡社）

テキスト相互関連性について

東京お茶の水のアテネ・フランセAthénée　Françaisで、フランス文学の講義を受けていた頃のことである。マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』À la recherche du temps perduの一節を原文で読んでいた。この作品は遠い記憶をよみがえらせることが、中心的なテーマとなっているが、象徴的な表現が冒頭に出てくる。読書をしながらうとうとしていると、「本に出てきた教会とか、四重奏とか、フランソワ一世とカルル五世との軋轢あつれきなどといったことが、まるで、わが身のことのように思える」と書いた後、語り手の私は意識を保ちながら夢を見続ける。

列車の汽笛が聞える。それは、遠くまた近く、森の小鳥の歌のように距離を教えながら、つぎの駅に向って旅客の急ぎたどってゆく曠野のひろがりを描いてみせる。そしてその旅人のたどりにゆくささやかな路は、新しい土地や、しつけぬ行為や、今もなお夜のしじまのなかを追っかけてくる見なれぬ明りのもとで交わしたさっきの雑談やら別れの挨拶やら、目前に迫った帰宅の楽しさなど、およそそうしたものからくる興奮のために、彼の思い出のなか深くに刻みつけられることだろう。（淀野隆三・井上究一郎訳）

語り手の私は、実際に汽笛を聞いたのかもしれない。しかし、視界に現れたのは、聴覚に刺激された想像上のイメージである。音に色を感じたりする「共感覚」と、きわめて近い知覚の作用と思われる。意識のレベルを低下させていき、現れた断片のイメージを、ある対象になぞらえることで、次第に映像は現実味を増して動き出す。目覚めながら夢を見ることは可能なのである。いわゆる「入眠時幻覚」である。私が懐中時計を確かめると、まだ真夜中だった。

その一節を読みながら、僕は講師のジェラール・シアリGérard

Siary氏に、ネルヴァルの「シルヴィ」の原文を見せた。僕はプルーストがネルヴァルの影響を受けて、この有名な冒頭を描いたのではないかと思ったのである。「シルヴィ」の場合も、語り手の私がベッドの中で「夢うつつの境でうとうとしていると、幼い頃のすべてが記憶のうちを去来」し始める。

私の眼の前によみがえってきたのは、スレートぶきの尖った屋根があり、そして角の所は黄色い石を交互に組み上げた赤さびた正面を持つアンリ四世の時代の一つの城館と、楡や菩提樹に囲まれた大きな緑の広場だった。樹々の葉むらを、夕陽の燃える征矢そやが貫いていた。若い娘たちが、芝生の上で、母たちから伝えられた古い唄をうたいながら輪になって踊っていた。実に自然で純粋なフランス語で綴られたその唄を聞いていると、千年以上ものあいだフランスの心臓が鼓動していたこのヴァロアという古い土地に自分が今まさに身をおいていることが、しみじみと感じられてくるのだった。（入沢康夫訳）

　シアリ氏は二つの文を見比べながら、しばらく考えてから答えた。両者は似ているけれども、直接の影響があったかどうかは分からない。これはアンテルテクスチュアリテintertextualitéだねと答えた。ブルガリア出身の記号論学者ジュリア・クリステヴァJulia Kristevaの定義によれば、「すべてのテキストは引用のモザイクとして作られており、他のテキストを取り込み変形したもの」ということになる。「間テキスト性」と訳されることがあるが、何のことやら分からないだろう。「テキスト相互関連性」と言った方がいい。

　すべてのテキストは関連があり、個別の影響を考える以前に、そもそもつながり合っているというのである。全くの独創などありえず、新しさが感じられるものも、既存の作品が組み合わされ、作り替えられたものに過ぎない。筆者がそれを意識していなくても、そうしたことは起こっている。なぜなら、人類によって書かれなかっ

た物語はなく、表面的な違いはあったとしても、テーマ自体は通底しているからである。

参考文献

ジェラール・ド・ネルヴァル「シルヴィ」（入沢康夫訳　講談社『世界文学全集 ネルヴァル　ロートレアモン』所収）
マルセル・プルースト『失われた時を求めて』（淀野隆三・井上究一郎訳　新潮社）

物自体・想像力・意識

ギリシャの哲学者プラトンPlátōnは、イデアideaという真の実在を想定した。イデアは感性を超えた存在で、理性のみが認識できるとした。一方、ドイツの哲学者イマヌエル・カントImmanuel Kantは、認識する主体から独立した「物自体」は、認識できないと考えた。素朴な実在論は否定されている。

人間は感覚を通じて世界の現象を知覚している。「物自体」は不十分な情報としてしか意識に到達しないため、現象として現れた時点ですでに解釈を受けている。プラトンの主張するような、理性のみが認識できる実在を想定すること自体、イデアが空想の産物にしか過ぎないことを物語っている。「物自体」の存在は想定できても、認識できないというカントの考え方の方が説得力がある。

視覚の科学的実験によると、動く物体の正確な位置と形態は、人間の網膜にはとらえられていないという。液晶モニターが速く動く物を、ぶれた形でしか映し出せないのと同じである。視覚から入ってくる情報が不足している場合、前後する情報から推測し補完することで、なめらかな動きが知覚されるのである。そこには広義の想像力が働いていると言えるだろう。

それでは、「物自体」と切り離された想像力とは何だろうか。現実の対象に依らない映像としては、まず夢が挙げられる。夢には前日得た情報を記憶として残すかどうか、取捨選択する働きがあるとされる。さらに心の深層には、個人の無意識という枠を超えたイメージの宝庫があって、心理学者のカール・グスタフ・ユングCarl Gustav Jungは、それを「集合的無意識」Kollektives Unbewusstesと呼んでいる。これは民族の文化や宗教を生み出す源泉となっている。

二十世紀フランスに生まれたシュルレアリスム（超現実主義）の運動は、現実と夢を統合した全体性を志向した。文学にせよ、美術にせよ、無意識に眠っているイメージを活用し、それを芸術に生か

そうという熱意は、想像力とコンタクトをとる方法を探索させる。アンドレ・ブルトンAndré　Bretonやフィリップ・スーポーPhilippe Soupaultが行った「自動筆記」écriture automatiqueは、シュルレアリスムの理論を築く上では欠かせなかったが、意識に統御されない言葉の羅列を示すのみで、大きな文学的成果が得られたとは言えない。意識の底にあるイメージを導き出すのが重要であって、それを他人にも理解可能な言語にするのは、あくまでも意識だからである。

　では、意識の底にあるイメージは、どのようにとらえられるだろうか。夢を記録する方法もその一つであるが、イメージを自在に統御する方法が、秘教と呼ばれる宗派には伝えられている。高校から大学にかけての時代、僕はその種の実験に耽っていた。W□E□バトラーWalter Ernest Butlerの『魔法入門』Magic,Its Ritual,Power and Purposeや『オカルト入門』 How to Read the Aura and Practice Psychometry,Telepathy & Clairvoyanceには、この種の本にありがちなはったりは感じられない。人間の意識について、心理学的な知見に基づいて、客観的に記述するとともに、実践的な方法にも触れているのである。「閃ひらめく色彩」という赤と緑、紫と黄色など補色の関係になった幾何学的模様を眺めていると、その残像を容易に白い壁に映し出せるようになる。これは生理的な現象であり、現実に存在しないものを、意識的に見る技法の一つである。慣れてくれば、残像の大きさも自由に変えられるようになる。この種のイメージ変換は、例えば真言密教でも行われており、梵字ぼんじを利剣に変え、さらに不動明王ふどうみょうおうの姿に変えたりする。これらは意識によって、映像を統御する方法である。

　いま一つは、無意識にある未知のイメージを意識がとらえる実験で、水晶玉を眺めるうちに、それらが映し出されるというものであるが、何も水晶玉など用意する必要はなく、黒い画用紙に白い円形の紙を貼るだけでいい。薄暗い部屋でリラックスした状態で、白い円盤を眺めていると、しだいに靄もやのようなものがかかってくる。そのうちに宝石のようなきらめきが垣間かいま見られ、夢の断片も目にすることができるようになる。

無意識のイメージを活性化することは、特に絵画などを制作する際には有効だと考えられる。この種の幻覚を見る実験で、全く何も見えないという人は、むしろ安全なのかもしれない。いくら能力に長たけていても、無意識の力をコントロールできない場合、狂気に陥る可能性が高い。目覚めている間も、幻覚に悩まされる恐れがあるのだ。ネルヴァルの『オーレリア』は、夢の世界を言語化した稀有けうな美しい作品であるが、作者をバリの裏町で縊死いしさせた。

私はまことに甘美な夢から覚めた。それは、かつて私が愛していた女性が、姿を変え光り輝いているのに再会するという夢だった。空はすっかり栄光につつまれ、そこに私は、イエス・キリストの血で記された「赦免パルドン」という言葉を読みとった。その時突然一つの星が空にまたたき、この世と他のさまざまな世界の秘密を私に洩らしてくれるのだった。（ネルヴァル『オーレリア』稲生永訳）

比較的安全な方法としては、ユングが紹介している「入眠時幻覚」がある。寝床に入った段階で、意識のレベルを低下させていき、覚醒と眠りの間の中間状態にとどまるようにする。やがて線や図形の一部が見えるから、それを何かの一部だという暗示をかけると、夢の断片が姿を現して勝手な動きを始める。それを観察していくのである。

ゲーテなどは蕾つぼみの花が開花していくさまを、この種の方法で目にしていたという。ただし、過度に行うことは禁物きんもつである。夜道を歩いている夢を見ている間、私は冷ややかな空気の流れや、路面を踏む靴の感触まで感じられ、余りの現実感に驚嘆させられた。夜ゆっくり休むことは、日常生活を健全に送る上で欠かせない。一晩中起きているような疲れを感じたら、しばらくの間は中止した方がいい。

ここまで想像力を活性化する方法について述べてきた。画家のゴッホは幻覚作用があるという、ニガヨモギ入りのアブサン酒を飲んでいたと言われるが、何も薬物に頼る必要などないのである。ただし、幻覚が見られたからといって、すぐに芸術が生まれるわけではなく、それを意識が統御して、絵画や文字で表現する過程が重要であり、そのための技法も知らなければならない。

参考文献

アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』（巌谷國士訳　岩波書店）
カール・グスタフ・ユング他『人間と象徴』（河合隼雄監訳 河出書房新社）
ジェラール・ド・ネルヴァル「オーレリア」（稲生永訳　講談社『世界文学全集 ネルヴァル　ロートレアモン』所収）
W□E□バトラー『魔法入門』（大沼忠弘訳　角川書店）
W□E□バトラー『オカルト入門』（大沼忠弘　角川書店）